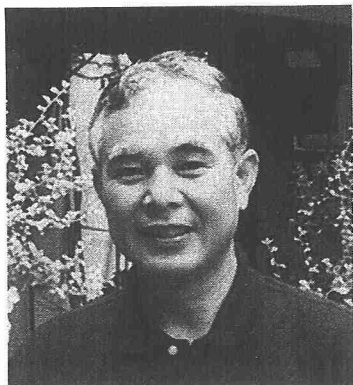


評議員に就任して



岡村 定矩 (天文学専攻)

okamura@astron.s.u-tokyo.ac.jp

濱野先生の後任としてこのたび評議員に選出されました。自転車操業でその日暮らしをしている身がこのような大役を仰せつかるとはまさに晴天の霹靂でした。私は東京大学の助手に採用されて以来、1991年に天文学教室に移ってくるまで13年間の研究生生活を長野県の本曾観測所で過ごしました。あまりにものどかな環境であったせいか、理学部・理学系研究科全体のあり方やそれに対する自分の責任といった問題をほとんど意識しないまま若い時期を過ごしてしまいました。ましてや東京大学に関しては言わずもがなでありました。本郷に移ってから「三つ子の魂百まで」というわけで、理学系研究科には大した貢献もできずに現在に至っております。私は主に可視光で銀河・銀河団の観測的研究を行っています。我が国にはこれまでこの分野の世界最先端の望遠鏡はありませんでした。このほどハワイに「すばる」望遠鏡が完成し、私たちのグループもその観測装置の一つを開発して、これからようやく学生の頃夢に見たような観測ができると期待しているこの頃です。そんな矢先に評議員に選出されたのは、これまでのつけが回ってきたのに違いありません。

理学系研究科では将来計画委員長を仰せつかっていますが、実はまだ委員長として一度しか委員会を開いていない時点で本稿を書いています。将来計画委員会は今年度佐藤委員長の下で、東大及び広く国立大学の独立法人化問題について精力的な活動を繰り広げてこられました。そもそもこの問題が政府の「行政改革」の一環として、国立大学の独立「行政」法人化として提起されたこと自

体が、想像を絶する不見識であったと私は個人的には思っております。さらに、「何ら日本の高等教育、学術研究のビジョンもないまま」、また国民がほとんどその実態を理解する時間もないうちに、平成11年7月に法人化の基礎をなす独立行政法人通則法が成立してしまいました。このことは最近のこの国のありようを端的に示しており極めて遺憾なことです。国家百年の計に関わるこのような問題は、時が時であったら、国会議事堂前を埋め尽くすデモが起こっても不思議ではないものであったと思います。

しかしながら、諸般の情勢を見るに、国立大学の法人化そのものはさけられない事態であると思えます。文部省では平成13年夏頃には関係法令の骨子を固める予定で、調査検討会議を置いて精力的な検討を始めています。この限られた時間のうちに、目指すべき理想の大学像を掲げ、その追求にとって益するような、少なくとも妨げになることの決してないような法人化後の枠組みを作るために、東京大学として全力を尽くさなければなりません。理学系研究科の諸先生を含む多くの大学人の多方面への働きかけによって、国立大学の法人化は「通則法」をはみ出す必要性の認識が高まったとはいえ、具体的な制度設計の大枠が見えてこない限り最後まで予断は許せません。理学系研究科の将来計画委員会として、いつどのようなことをすべきかはまだ私には十分わかっていませんが、引き続きこの問題が中心的な検討課題であると認識しております。

法人化という公務員制度の根幹の変更を検討している一方で、何ら根本的な見直しのなされる気配のない定員削減の割り当てなど、他にも重要な問題は山積しています。社会に対する大学の発言力が昔より低下しているように見えることも気になっています。もとより微力ではございますが、研究科長を補佐して理学系研究科のため、また東京大学のために尽力するつもりですのでどうぞよろしくお願いたします。お気づきのことがあれば何なりとご意見をお寄せください。